

## 「主の宣教に与って」

マルコによる福音書 6章6：13節

森島 牧人 牧師

今日与えられた聖書は、マルコ6章の中の「12人を派遣する」という小見出しが付いているところです。

ナザレへの帰郷を拒否された主イエス、それは自身の土台を切り離されるということでした。故郷の人々の不信仰に驚かれた主イエスでしたが、ここから、主イエスの新しい歩みが始まることとなります。それは、自分の知らない人々と共に生きて行くという歩みでした。十字架の待つエルサレムを目指しての主イエスの宣教は、辺境に向かう道をそのスタート地点として始まることとなったのです。パウロの宣教活動もこれと同じでした。12使徒に含まれていなかったことで使徒たちから拒否されたパウロは、殉教に至る宣教の道を異邦の地に求めることとなったのです。

今日の聖書は、そんな主イエスが、12人の弟子を伝道のために派遣される場面です。聖書には「12人を呼び寄せ、2人ずつ組みにして遣わすことにされた。」(マルコ6：7)とあります。弟子になって間もない彼らは、宣教のための学びも不十分でした。そんな弟子たちに対する主イエスの派遣の命令は、私たちに「主イエスから離れての宣教など、未だ早いのではないのか」という疑問を抱かせます。しかし、ここで私たちが知らなければならないのは、「神の時」ということです。それは私たちが考える「時」とは全く異なっているものです。それでは、その神の時はいつであるのか。それは、不十分であるように見えたとしても、主イエスの命じられる時、それが「その時」であるのです。

聖書には主イエスの命令「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように・・・」(同6：8-9)が続きます。旅に出るに当たって彼らに許されたのは、杖と履物のみでした。弟子としてなにもかも不十分なまま、何も持たずに主のもとを離れ、身の安全を保障するものなど皆無のところへ派遣されて行く弟子たち・・・この時、弟子たちが求められたのは、アブラハムやエジプトを出る民のような、「神への絶対的な信頼」でした。初代教会の人々にも求められたこの「神への絶対的な信頼」は、2千年の時を経た今、キリスト者である私たちにも求められています。何も持たずに宣教する弟子たちの姿、それは主イエス・キリスト自身の姿でもあります。そして、ここにこそキリスト教の、教会の、宣教の起源があるのです。

主の宣教に与る教会ですが、まず宣教は宣伝ではありません。従って、教会はキリストを宣伝するところではありませんし、また、人間の言葉で人を説得するところでもありません。宣教とは主の福音を運ぶこと、これ以外の何ものでもないのです。それは主イエスの持つ権威を伝えるということです。弟子たちに杖と共に履物が許されたのは、「神の国が来る。悔い改めなさい」という福音を運ぶ弟子たちの足を大切に守るためでした。私たちは教会が、この「福音を運ぶ」ことのためにあることを忘れてはなりません。

今日の聖書の中の主イエスの弟子たちへの命令は、神への絶対的な信頼という「終末論的な信仰の確立」を求められているものでした。それは、今を生きる私たちキリスト者も、神への絶対的な信頼という唯一のこのことの中に生きて行く者であることを、示しているのです。

(説教要約 羽入田悦子)